

## 5・トワちゃんと初めてのデート

数日後。トワとの約束の日。

主人公、仕事を終え、トワとの待ち合わせ場所へ向かっている。

しかし、主人公が到着すると、トワはなぜか待ち合わせ場所で、華やかな雰囲気の、さらに寛ぎもいい男性達に囲まれている。

主人公、それを見て途端に気後れしてくる。

自分は、今こそ周囲が『ヒーロー』とはやし立ててくれるが、基本的にはさえない女性。美人な上頭も良い、将来有望なトワとは、一緒に歩いても釣り合わないのでは……。とう、しゅんとした気分になつてくる。

SE1：【264まで流す】大学の環境音  
SE2：【0—7秒ほどまで流して、立ち止まる】主人公の足音

トワと男性達が会話する声は遠い。あまり聞こえない。

※声が少し遠い

「トワ」

「うーん、行かないです♥

【迷惑している。一見いつもの明るいトーンだが、若干声が低い】  
だからあ。行かないですってば。

【主人公に気づく。とたんにテンションが上がる】※声が大きくなる  
あー！ 来てくれたんですねえ！

【小さめの声で男性達に向かって。一見いつもの明るいトーンだが、声が冷たい】  
それじゃようなら。また院で♥」

SE3：【38—43秒ほどまで流して、立ち止まる。本来の音源より早めに加工する】トワが主人公に駆け寄る音

SE4：【11—15秒ほどまで流して、立ち止まる。本来の音源よりも早めに加工する】主人公も、小走りでトワのところへ向かう音

主人公、つい数秒前まで不安でたまらなかつたが、駆け寄つてくるトワがあまりにも嬉しそうなので、ホッとする。

主人公、トワが近づくと、ふんわりといい匂いがして、思わず胸がときめく。

主人公『トワちゃんいいにおいするなあ……。美人という生き物は、だいたいいつもいい

におい……。さとりもそう……』と内心うつとりしている。

一方、トワも『ああー♥ 今主人公のにおいがふわつてしましました！ このにおい、好き！』

と思っている。

トワ、もはや主人公しか見えていない。

トワは主人公といると、普段の三倍は明るくキラキラニコニコしているのだが、主人公は案の定そこのところがわかつていない。

『トワちゃんって元々明るくてニコニコしてて感じのいいタイプだし、いつもみんなにこんな感じなんだろなあ。学生の頃同じクラスだったお姫様みたいな女の子も、分け隔てなく誰にでも感じが良かつたし……』などと、見当違いのことを考えている。

トワは実際母星では本物のお姫様だったが、その性格は『誰に対しても分け隔てなく、いつも明るくニコニコしている、お姫様みたいな女の子』には程遠い。ただの性悪宇宙人である。

〈主人公〉

「トワちゃんこんばんは！ ごめんね、お待たせしちゃって」

〈トワ〉

「こんばんはあー！ ううん♥ ゼーんぜん待つてないです♥  
それよりごめんなさい。今日はわざわざ大学院まで来ていただいて」

トワが所属する大学は地域で一番の難関大で、さとりの母校もある。さらに言えば、さとりの一族が創設にかかわっている大学である。

その正体はアメリカのある大学と密接につながり、なぜかこの街に集まりやすい『人間でないもの』を積極的に受け入れ、学ばせている場所。

母体はアメリカにあるので、トワは十二年前、まずはさとりの手引きでアメリカに向かい、大学卒業まで向こうで学んだ後、実質の姉妹校であるここへやつてきたのである。

つまり、トワの通う大学はさとりのテリトリーであり、さとりの要望であればおおむね通る。そのため、トワは奇妙な時期に今の大学院へ来られたのである。

なお、さとりは現在、二つの大学を行き来しながら『人間でないもの』達が人間社会で暮らすためのサポートする仕事をしている。

しかし、主人公にはその詳細を伝えていないため、主人公はさとりのことを『外資系のすごい仕事をしているO.L』だと思い込んでいる。

ちなみに、主人公はこの大学をさとりと一緒に受験したが落ちたので、その点でもこの学校と、この学校の学生にコンプレックスが少しある。

〈主人公〉

「いいのいいの。トワちゃんの大学、一度来てみたかったし。  
あの……さつきの人達は……お友達？」

トワ『やはり聞いてきました』と思つて いる。

トワは宇宙人なので、正直なところ地球人の美醜はよくわからない。

だからまるでこだわりもないし、そもそも主人公に『一生ラブ♥』なので、主人公以外の地球人を恋愛対象と捉えることもない。

だが、地球人の方はそうは思わない。というかまず、トワの正体を知らない。  
なので、トワは周囲から何かにつけ恋愛の話をされる。それだけならまだ仕方ないのだが、周囲はトワのことを異性愛者と仮定して『男性の恋人を作らないのか』と聞いて来るので、トワは内心辟易しているのである。

トワ、自分の片想い相手はもはや同種ですらないので『トワはー。すでに異性愛者でも同性愛者でもなく、言うならば異種愛者なんですよー？　あーでもこれ揚げ足取りつていうか、ダジヤレみたいなものですよねー？……絶対言うのはやめときましょっと』と思つて いる。

〔トワ〕

【主人公に少しでも誤解されたくないので、きつぱりと】  
いいえ？　ただの院の知り合いです。

あの人達、今日食事会があるみたいで。来ないかってちょっとしつこくってえ」

〔主人公〕

「行かなくてよかったです。学校の用事なのに……」

〔トワ〕

【主人公がなぜそんなことを言い出すのか理解できない】  
ううん？　行かないですよ？　なぜ？」

しかし主人公は当然トワの指向も知らなければ、そもそも好かれていることにも気づいていない。さらに、自分が落ちた大学に通う華やかな男性達にモテモテなトワを見て、じわじわと『やっぱり場違いだつたのでは……』『トワちゃんは、ああいう人達にこそこの街を案内してもらうべきなのは……』と思つて いる。

主人公は心優しく誠実だが、いかんせん卑屈で自分に自信がない。

『いい年して卑屈すぎるのはみつともない』と、主人公自身も改めようとしているのだが、たとえば『自分に自信を持つて、今日からは頑張ります♥』など宣言して、すぐに自分に自信を持てるのならば、誰も苦労はしないのだつた。

〈主人公〉

「だつてトワちゃん、まだこっちにきたばかりで、知り合いとか少ないんだよね？  
せつかく交流会があるなら、行かないともつたいないんじやない？  
わたしとだつたら、いつでもお出かけできるし……。」

あと皆さん、なんだかすごく格好いい感じの人だつたよ？」

そしてトワも、そんな主人公の性格を理解している。

だが、主人公のようなタイプの人間に『お前は自己評価が低い。もつと自分に自信を持つべきだ』などと指摘したところで、ピンと来るはずもないこともわかっている。

なぜならば、トワも本来は同じタイプの宇宙人だからである。

トワは母星ではみんな同じ種なので、生来の気の強さでブイブイ言わせられたり、今も美女に擬態しているので、表面上は堂々とできる。

しかし、今のトワの見た目は、いわばゲームのアバターのようなもの。

地球で生きると決めた際に、さとりに紹介された、とある施設の技術さえあれば、誰でも人外から美女の人間に変身することができる。なので『ならば美女に』と、今の姿を選んだだけなのである。

なのでトワ『美女アバターでモテてもしようがない。それから、アバターが美しいからといつて自分が美しい地球人だと思い込むのは、あまりにもバカすぎる。自分の正体はグロテスクな宇宙人なのだから、容姿を誉められても勘違いしてはいけないし、モテて調子に乗るのは愚の骨頂である』と思つてはいる。

同時に『見た目でちやほやされても、本当の姿を見たら、人間の皆さんはきっと逃げてくれるでしようし……』とどうしても自信が持てない面があるのでした。

ちなみにさとりも同じ意見である。

だから二人は『どうせなら美女のアバターにしよう』とその場の勢いで自分の容姿をよくし過ぎたことを後悔している。なので、誇示しないのだった。

しかしそんな姿は、主人公には『本物の美人は、謙虚で心もきれいなんだな……！』と思われてしまう。

結果、大きなずれ違いが生じてはいるのだった。

〈トワ〉

【心底理解できないが、冷たく聞こえないように気を付ける】

あははー。なるほど♥

【本当は『全く興味ない』なのだが、それだと感じが悪いのでマイルドな表現をする】

でも。イケメンとかお金持ちとか。トワあんまり興味ないです。

【さらりと。実際は自分に言い聞かせるように】

今は、誰かとお付き合いするとか。考えてないので♥

【さりげなく主人公の手を取る。『新しくお友達になつてくれた方』とはもちろん主人公のこと】

だから！ 新しくお友達になつてくれた方が。今は一番。大切です♥  
『わたしとだったら他の日でもいいから』なんて言わないで下さい。  
トワ、今日をすっごく楽しみにしてたんです。

今日はよろしくお願ひしますね♥」

〈主人公〉

「そつか。なら、良かつた。わたしこそ今日はよろしくね！」

主人公、トワの言葉にホッとした表情になる。

トワ、それを見て『主人公可愛いです……。地球の美醜とかー、いまだにまるでピンときませんけどお……この人は絶対可愛いです！ はあなんか緊張してきました』と、きゅんとなる。

〈トワ〉

【ぽろつと本音が漏れる】

はあ。でもなんだか緊張します。

【恥ずかしそうに。勇気を出してドキドキしながら言う】

※お世辞っぽく聞こえないように注意して下さい

その。アナタって、すごく可愛い方なので。

一緒に歩けるの、嬉しいですけど。ワタシの格好これで大丈夫か、なんだか不安です！」

〈主人公〉

「え？」

〈トワ〉

【主人公が驚くので驚いている】

「え？」

トワ、わかつていても驚く。主人公のリアクションは想像できたが、自分としては勇気を出して言つたので、こうもあからさまに『そんなバカな』という反応をされでは、なんだか自分の想いが拒絶されたようで、悲しくなつてしまふ。

〈主人公〉

「え？」

〈トワ〉

「内心『もう一回やるんです』と思つてゐる』  
え？」

〈主人公〉

「なんでそうなるの？ 逆だよね？」

〈トワ〉

「困惑して。明るくコミカルなノリだが、少し悲しそうに【なぜ逆でしょと言われますー？】

〈主人公〉

「だ、だつて……。かわいいのはトワちゃんでしよう。  
かわいいだけじゃなくて綺麗だし、頭もいいし……。  
わたしなんて、どこにでもいる普通……いやあ、普通以下くらいの人だよ！  
ああ、そんな風に言われること全然ないから、いやー、びっくりしちゃつた！  
でもありがとう！ ありがとうね！」

主人公、卑屈になるのはいけないと思いつつ、軌道修正の仕方がわからない。

主人公としては、自分のことを美形だとか、可愛いだとかはとても思えないのだが、せめてそう言つてくれたトワに、お礼は言いたいと感じる。

そのため何とか明るい方向に戻すが、トワにはそれが痛々しく感じられる。

トワ、何とか主人公に自分の想いを伝えようと慌てて話すあまり、ますます一人称がごつちやになる。

トワは主人公の前では知的な女性だと思われたいので、一人称『ワタシ』で通したいのだが、気を抜くとどうしても素の一人称『トワ』が出てしまうのである。

なぜならトワの名前は主人公が付けたので、トワはそれを自慢したい。特に主人公と一緒にいられなくなつてからは『トワの名前、トワっていうんですよ！ 主人がつけてくれたんですよ！』と少しでも主張したいと思つた結果、こうなつてしまつた。しかも、十三年たつた今も直つていない。アメリカにいたときは英語で話していたので直す機会もなかつた。ちなみにさとりは『その年で一人称が自分の名前とか……。意図するところはまあわかるけど。それ、貴方が外国人みたいなものだと思われているから許されているだけだつて……。忘れない方がいいわよ？』と冷たい。さとりはトワに対して、基本的に辛辣である。

〈トワ〉

【やや不満げに】

そんなことありません！

【言うと緊張する】

アナタはとっても素敵♥ です♥

【少し早口でからかうように】

まあ、ちょっとと鍵なくしたり、おまぬけさんなどころもありますけど。  
すぐ可愛いい人です。

【実際はそれが理由ではないのだが、主人公を勇気づけたいのでつじつまを合わせて話す】

だからワタシ、アナタに出会つてすぐお友達になりたいなあ♥ って思つたんですよ？  
それい。アナタのことをよく知らない人だつて！  
アナタのとつても勇敢で優しいところを知れば。  
きつと大好きになつちやいますよ♥』

トワ『ていうか、それが理由で、少なくとも二名の女性つていうか人間じやないものにモ  
テてますし。ああ、今、間接的にだけど大好きつて言つちやいましたー！』と思つてゐる。  
しかし主人公、なおもトワの意図を理解していない。それどころか火災の話題になつたこ  
とで、さとりに続き、トワにも真相をわかつてもらおうとし始めてしまふ。

〈主人公〉

「あつ……ありがとうございます！」

……でもあれは、他に助けてくれた人がいたからなんだ。

誰もその人を見てないから、みんな夢だつて言つうんだけど……。

火災の日、今にも倒れそうになつてたわたしと大家さんを助けてくれた人がいたの。  
だからわたしはヒーローつていうか、どちらかといふとなり損ねた人なんだよね。  
気持ちは嬉しいけど、ちょっと恐縮しちやうなあ……』

〈トワ〉

「火事の日は、他に助けてくれた人が？」

【不自然にきつぱりと】

そうだとしても。

【不自然に別の方に向に話を持つて行こうとするが、結果的にまるであの場にいたかのよう  
な発言をしてしまう】

あれはアナタのお手柄です！

【自分のミスに気づいていない。明るく励ます】

だつて最初に建物に戻つて、大家さんを見つけたのはアナタなんですから♥

自信持つて下さいね♥

それじゃ行きましょつか！ バ】案内。お願ひします♥」

〈主人公〉

「そうだね。ごめんね、なんだかさつきから気を遣わせちゃって！  
お詫びに、今日は完璧にエスコートするから！」

【SE5】〔2音源とも、0—5秒ほどを一緒に流す】一人が歩き出す音

一度フェードアウトする。

\*\*\*

【SE6】〔0—5秒ほど流して、それから342まで小さく流れ続ける】街中の環境音

数十分後。

主人公とトワ、雑貨屋に来ている。

トワ、店があまりにも自分好みなので、驚いている。

〈トワ〉

【素が出るほど感激している】

すい……ん……ん……こんなお店、あるんですねえ！」

〈主人公〉

「良かつたあ。気に入つてもらえた？」

主人公、トワがとても喜んでいるので、嬉しい。

主人公、今回トワを案内するにあたり、先日トワの部屋を訪問した日のことを参考にして  
いた。あのとき見たトワの持ち物などを思い出して、今日はトワが好みそうな場所を中心に  
回れるようコースを考えたのである。

〈トワ〉

【素が出るほど感激している】

はい！ すい……ん……ん……、好きです。こういうお店。  
新しいお部屋。こ！ こういうインテリアにしたいなあって思つてて……。

【最初は『どうしてわかったんです？』と思つていたが、話している途中で察する】

なつ。なんで……あつ！」

〈主人公〉

「うん。この前トワちゃんのおうちにお邪魔させていただいた時のことを思い出して。トワちゃんこういうの好きかな？ と思って、ここにしたんだ。

まだ家具とか足りないものあるんだよね？」

よかつたら、ここで探そうよ」

トワ、主人公はさらりと言っているが、探すのには相当の苦労があつたろうと感じる。その気持ちがたまらなく嬉しいし『こんなのもつと好きになつちやいます！』と思っている。

トワ、主人公はあくまで自分のことを大したことのない人間だと言い張るが、実際はこんなに他人をきちんとよく見ていて、それを生かした細やか、かつぴたりな気遣いをしてくれる人はなかなかいないだろうと感じる。

主人公のはからいが嬉しいくて、顔が真っ赤になる。

〈トワ〉

「トワのおうち見て。トワの好きそうなお店、探してくれたんですね？」

【嬉しさのあまり、顔が真っ赤になる】

嬉しいです……。すごく細かいところまで、見てて、くださるんですね……」

〈主人公〉

「喜んでもらえてよかつたあ。他にも何軒かピックアップしておいたからね。時間の許す限り、一緒に回ろうよ」

〈トワ〉

「え？ ほ！ 他にも候補を、そつちも早く行きたいですう！」

【あでも】は【あ、でも】だが、感激するあまり早口になり、くつついてしまう【あでも…。こゝもゆつくり見たい、です。

すごい。嬉しい、です……。

【聞こえないほど小声で】

やつぱりアナタ、素敵です。何も変わつてない……」

〈主人公〉

「うん？」

〈トワ〉

「泣きそなほど嬉しい】

いいえ♥ 何でも♥」

SE7：1—2秒の1回分の『カシャン』という音のみ流す】カシャンという、店内の商品を手に取る音

トワ、嬉しくなり、今日は目いっぱい買い物を楽しもうと感じる。

〈トワ〉

【真剣な面持ちで】

ところであのぉ♥

こいつのマグとこいつのマグだったたらあ。アナタはどっちがいいと思ひます?】

一度フェードアウトする。

\*\*\*

深夜。終電後。

主人公とトワ、マンションまで戻ってきた。

主人公とトワ、あれから終電ギリギリまで盛り上がり、楽しく買い物をした。

主人公はあの後もトワの好きそうな場所へたくさん連れて行き、トワの胸の高鳴りは最高潮。

トワ、主人公は自分よりも年上だが、自分よりも背が低いし、服装も化粧もシンプルで、高価そうなものも持っていない。そのためこれまで、正直なところ自分達を、同世代のようを感じているところもあつた。

だが今日一緒に過ごした結果、『年齢』という点において、一人の違いは何気ない部分に強く出ていたとトワは感じる。

今日は案内という名目だったとはいっても、主人公は、行き先をすべてトワの好みに合わせてくれた。トワが少し疲れてくる直前に休めそうな店へさりげなく連れて行ってくれるし、雑談をしている時も、本人は自分をつまらないと言い張るが、話題が豊富で話していく楽しいし、聞くのもうまい。

何より無理に自分をよく見せようとせず、ナチュラルなところが良い。自分に自信がないというのだが、良い方向にも作用した結果であるとトワは考える。

トワ、主人公は、やはり余裕ある、年上の女性なのだと感じる。

トワ、胸のときめきが止まらず、ずっとドキドキしている。

もつと一緒にいたいのに、もう家についてしまうことがもどかしい。

そうしているうちに一人、部屋の前までたどり着いてしまう。

あとはお互いの家に入るだけという状況。

**SE8**：【0—3秒ほど流して、その後小さくなり、トランク終わりまで流れ続ける】マンションの環境音

**SE9**：【SE5と同様に、2音源とも、0—5秒ほどを一緒に流す】マンションの廊下を二人が歩く音

※二人とも部屋の入口まで来ている。立ち止まって会話開始

〈トワ〉

「はああ！ たくさんお買い物しちゃいましたねえ！

終電ギリギリになつちやいましたあ。

あのっ。今日はありがとうございました。とっても楽しかったです♥」

〈主人公〉

「とんでもない！ わたしもすごく楽しかった。

短い時間だつたけど、この前のお礼ができたなら嬉しいよ。

こんなに笑ったの、久しぶり。もう解散なのが淋しいくらい」

〈トワ〉

【残念そうに】

はい。本当にあつという間でした。

また♥遊びに行きましょうね！

【ドキドキと切り出す】

あの。今日、トワの好きそうなところだけじゃなくて……。

疲れたりしないようにルート決めてくれたり。

他にも色々。たくさん考えて計画してくれたんですね？』

〈主人公〉

「あ……」

主人公、その通りなのだが、認めるのはなんだかスマートではないような気がする。だけど本当は、気づいてくれたことが嬉しい。なんだかとても報われた気分になる。

なんと返せばいいか戸惑っていると、トワが微笑む。

〈トワ〉

「気づいてましたよ♥ ありがとうございました。すべく嬉しかったです♥  
な♥ の♥ でっ!」

トワ、主人公に向かって、小さな包みを差し出す。

SE10:【0—5秒ほどまで】プレゼントの包みを渡す、カサ、という音

〈トワ〉

「プレゼントですっ。今日のお礼♥  
このアクセサリー。さつきのお店で見てませんでした?」

〈主人公〉

「……!」

主人公、トワから差し出されたものに驚く。

それは、最初の店でこつそり見ていたアクセサリーだったからである。

買おうか悩んでいたのだが、自分には可愛らしすぎる、年齢的にも合わないかも……。と思、結局やめたのである。

主人公、トワは自分のことを『トワのことをよく見ていてくれる』と言っていたが、それはトワも同じではないかと思う。こんなことをされたのは初めてで、どんどん胸がドキドキしてくる。

〈主人公〉

「……見てた。ありがとう。すべく嬉しい……。もらつて、いいの?」

主人公『すぐ気に入つて、欲しいなつて思った。でも、似合わないかもと思つて買えなかつたの』という言葉を飲み込む。

トワは似合うと思つて買つてくれたのだと、わかっていたからである。

主人公、自分に自信が持てないのには変わりないが、せめてトワの気持ちを無碍にするようなことは言いたくないと思う。

〈トワ〉

「もちろんです♥ 受け取つて下さい。

ふふ。つけてみてくれますか?」

主人公が真っ赤になつて顔を上げると、トワの優しい表情がある。

主人公、頷くと、おそるおそる自分でアクセサリーをつけて、見せる。

〈主人公〉

「……どうかな……」

〈トワ〉

「うん♥ 似合つてます。」

【心から。思わず本音が漏れる】

※女性目線で見て憧れるおしゃれな美人に、こういうこと言われたら嬉しいなあ、という感じの言い方でお願いします。

すぐ可愛い」

主人公、顔を赤くして恥ずかしそうにしている。

トワ、それを見ていると、思わずキスしたくなつてしまふ。

なので、そうなる前に退散しようとその場を離れる。

〈トワ〉

「じゃあまた! おやすみなさい♥」

トワ、言うと、照れた様子で去つて行く。

SE11..トワが自宅の扉を開錠する音  
SE12..【0—3秒ほどまで流す】トワが自宅の扉を開ける音

主人公、しばらく動けず、そのまま見送る形になる。

しばらく環境音のみで、やがてフェードアウトする。

